

発達に特性のある子どもを持つ親の認知の変化 —放課後等デイサービスでのカウンセリング並びに コンサルテーションを通して—

Changes in Cognition of Parents having Children with Developmental Characteristics: Through Counseling and Consultation of After-School Care Service

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

長 岡 清 美

Kiyomi Nagaoka

I. 問題と目的

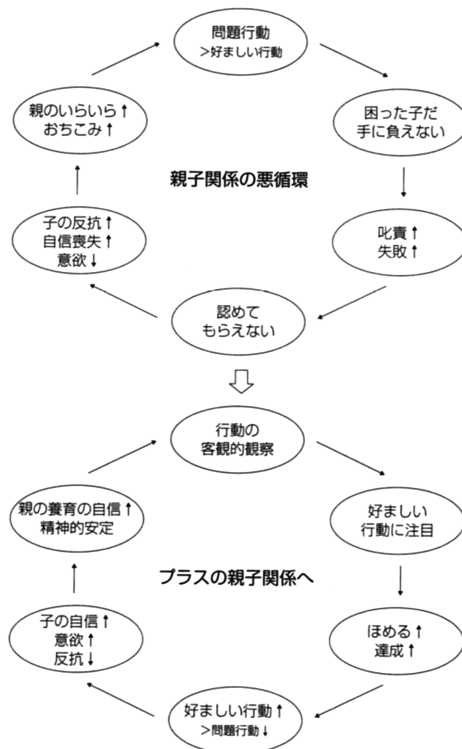
近年、「グレーゾーン」の子どもが注目されていることにより、発達障害の診断はないとしても、発達にでこぼこのある子どもに対する心無い見方は減少してきたと言える。しかし、「グレーゾーン」という言葉は、白黒はっきりしない曖昧な状況、灰色の暗さといった、ネガティブな印象を人々に与えるものと筆者は感じる。また、療育の場においては、発達障害の診断がなされているか・そうでないか以上に、子ども一人一人の発達のでこぼこを特性として捉え、一人一人の発達の特性に合った支援を行うことが重視される。そのため、筆者は本研究において、発達障害と明確に診断されている子どもと、所謂「グレーゾーン」の子どもを分けることなく、発達のでこぼこをより広く、連続的に捉えた〈発達に特性のある子ども〉という筆者独自の言葉を用いることとする。

そのような〈発達に特性のある子ども〉を持つ親は、一般の子どもの子育てにおいて親が感じる感情に加え、子どもの発達の特性を知ることによるネガティブな気持ちや葛藤といった、さまざまな感情を経験する。無論、〈発達に特性のある子ども〉を持つ親だからこそ味わう、子育ての醍醐味や幸福感もあり、そのように、〈発達に特性のある子ども〉を持つことを肯定的なまなざしで捉えることも重要である。しかし、そのような子育ての醍醐味や幸福感の背景には、〈発達に特性のある子ども〉を持つ親だからこそ抱く、子育てにおける困り感が存在していると考えられる。そのため、子どもの発達の特性の受容や、実際の関わり方の試行錯誤をサポートし、〈発達に特性のある子ども〉を持つ親の困り感を、僅かでも減少させることが、支援者には求められる。また、〈発達に特性のある子ども〉を持つ親を支援することは、子ども本人を支援することにもつながると考えられる。それは、親の認知を変化させることで、親子関係の悪循環を、プラスの親子関係へと変化させていくことが可能なためである（図1）。

このように、〈発達に特性のある子ども〉、そしてその親への支援が必要とされている中で、放課後等デイサービスという障害児通所支援施設が2012年に創設された。放課後等デイサービスの目的は、「学校通学中の障害児に対して、放課後や夏休み等の長期休暇中において、生活能力向上のための訓練等を継続的に提供することにより、学校教育と相まって障害児の自立を促進するとともに、放課後等の居場所づくりを促進」（厚生労働省、2012）することである。放課後等デイサービスに対する人々のニーズは高く、その支援内容は現在多様化している。しかし一方で、提供するサービスの質に関する疑問の声が挙がっているのも事実である。また、放課後等デイサービスを対象として行った研究自体が少なく、放課後等デイサービスの親支援について扱った先行研究は、これまでほぼない。

そこで本研究は、カウンセリング並びにコンサルテーションを通じた親の認知の変化を明らかにし、放課後等デイサービスのよりよい親支援の在り方について検討することを目的とした。認知に焦点を当てたのは、先述したように、親の認知の好ましい変化が、プラスの親子関係の重要な鍵となるためである。また、カウンセリング並びにコンサルテーションに焦点を当てたのは、放課後等デイサービスの親支援の中で最も日常的に行われている支援のためである。

図1 親子関係の悪循環からプラスの親子関係へ



（出典）岩坂英巳（2010）、「家族を支援する」『発達障害の理解と支援を考える』、臨床心理学増刊第2号、141項～147項

Ⅱ. 研究Ⅰ

1. 調査方法

(1) 目的

放課後等デイサービスでのカウンセリング並びにコンサルテーションを通した、
〈発達に特性のある子ども〉を持つ親の認知の変化を質的に検討することを目的とする。

(2) 研究協力施設概要

A 放課後等デイサービスに研究協力の依頼をし、同意を得た。ここでは、A 放課後等デイサービスの施設概要、支援内容について述べる。

A 放課後等デイサービスは、2013 年に開所された、創設 5 年目の施設である。原則として、子ども一人に対して施設スタッフ一人が対応することになっており、これがこの施設の特徴と言えよう。1 日の施設利用可能時間は、原則 1 人 1 時間である。子どもに対する支援内容は、主に 4 つである。その 4 つは、自立支援、課題解決力 UP、社会適応能力 UP、能力開発プログラムである。また、子どもたちが通う学校や、発達において重要な役割を果たす、地域の専門機関との密な連携も進め、協力関係の構築に努めている。親に対する支援内容は、主に 3 つである。その 3 つは、カウンセリング、コンサルテーション、保護者会・講演会である。カウンセリングは、施設を利用する親であれば必要に応じて無料で受けることができる。また、A 放課後等デイサービスでは、原則、送迎がないため、施設での親とスタッフの関わりの機会が多く、コンサルテーションも日常的に行われている。保護者会・講演会は月に 1 度開催され、親同士のつながりの場や、施設代表や外部講師の講演が行われる場となっている。

次に、以上述べた A 放課後等デイサービスの支援内容から、A 放課後等デイサービスの類型を考えたい。2013 年に、全国児童発達支援協議会によって行われた「障害児通所支援の今度の在り方に関する調査研究」によると、放課後等デイサービスは 12 の類型に分けられる。12 の類型とは、医ケア型、不登校型、療育支援型、異年齢交流型、ふれワーキング型、地域交流支援型、余暇支援（自己選択・決定）型、サロン型、ピア交流支援型（スポット療育）、思春期課題型、学校との連携型、家族支援型である。表 1 は、12 の類型の特徴を表にしたものである。この類型から考えると、A 放課後等デイサービスは主に、療育支援型、ふれワーキング型、学校との連携型、家族支援型にあてはまるのではないかと筆者は感じる。

表1 放課後等デイサービスの類型化

	類 型	事業所名	支援の特徴
対象児	医ケア児	①(株)ババママハウス	医ケアの必要な重症心身障害児の支援。土日の家族ニーズにも対応
	不登校児	②チェリーブロッサム	不登校中学生の支援として、午前中から学習支援やメンタルヘルスなどへの対応
支援の類型	療育支援	③放課後等デイサービス・インクル	聴覚障害児に対する就学前療育（児童発達支援）の継続、地域との交流
	自立準備型	④リトルプレイバー＝キッズ	モデルとなるお兄さん、お姉さん、大人と過ごす場、活動の提供
		⑤ちえりいくらぶ	就労支援事業併設の放課後等デイで、ぶれワーキングとして継続的に職業体験を提供
	地域交流支援	⑥ちゃちゃベリー	中学生以上クラスでは、地域資源の活用や地域の人へのヘルプスキル獲得などを実施
	余暇支援 (自己選択・決定)	⑦エイブルベランダ Be	単なる余暇活動の提供にとどまらず、地域の力を活用し、自己選択力も身につける
	サロン型	⑧フィール	障害の状況、種別に関わらず、居住地区での安心できる放課後の居場所を提供
	ピア交流支援 (スポット療育)	⑨こぐまクラブ	同じ年齢や障害像、課題のある子どもが集まり、活動を通して自己理解、他者理解などを深める
その他	思春期課題	⑩いちもく navi デイサービス	小グループによる SST の他、気持ち表現ツールなどを活用した自己理解、統制力醸成
	学校との連携	⑪どれみⅢ	学校との定例のケース会議の開催、学校とデイの相互見学、共通理解に基づく支援
	家族支援	⑫にじの☆ (にじのほし)	SNS の活用や茶話会の開催（異年齢児保護者との交流）、緊急時対応などを実施

(出典) 一般社団法人全国児童発達支援協議会 (2013)、「厚生労働省平成 25 年度障害者総合福祉推進事業 障害児通所支援の今後の在り方に関する調査研究報告書」

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaiho-kenfukushibu/0000067397.pdf> (閲覧日：2017 年 12 月 5 日)

(3) 研究協力者

研究協力施設から本研究の説明を受け、研究への参加に同意した、A 放課後等デイサービスを利用している親 12 名。表 2 は、研究協力者それぞれの、フェイスシートに記入された情報と、口頭で質問した事項（通所している子ども以外の兄弟構成、診断名、継続期間、利用頻度）をまとめたものである。

表 2 研究協力者の基本情報

	子どもとの関係	利用開始年齢(歳)		子どもの性別	通所している子ども以外の兄弟構成	診断名	継続期間	利用頻度	利用のきっかけ	キーパーソン
		親	子ども							
A	母	40代	10	男	姉、兄、妹	—	2年	週1	知人の紹介	夫(50代)、友人(40代)
B	父	30代	8、6	男、男	弟	—	半年	週2か3	知人の紹介	祖母(80代)
C	母	40代	15	男	姉、弟	自閉症	3年	週5	施設関係者の紹介	夫(50代)、母(70代)
D	母	40代	9、6	男、男	なし	—	1年	週3	知人の紹介	母(60代)、友人(30代)
E	母	30代	9	男	なし	自閉症	半年	週2	知人の紹介	祖父母(60代)、他のデイサービス2つ
F	母	40代	10	男	なし	—	半年	週3	知人の紹介	母(60代)、姉(40代)
G	母	50代	10	男	兄、兄	—	1年半	週1	知人の紹介	息子、娘(20代)
H	母	40代	7	女	なし	—	1年半	週2	保健士の紹介	友人(40代)
I	母	40代	10、7	男、女	なし	—	2年	週2	知人の紹介	祖父母(70代)
J	父	40代	9	男	なし	自閉症	2年	週2	知人の紹介	両親(80代、70代)
K	母	40代	10、6	女、女	なし	—	1年	週1	知人の紹介	友人(50代)
L	母	40代	10	男	妹	—	半年	週2	保健士の紹介	両親(60代)

(4) 調査手続き

2017年2月～3月、12名の研究協力者に半構造化面接を実施した。実施場所には、研究協力施設であるA放課後等デイサービスのカウンセリングルームを使用させていただいた。また、調査対象者12名全員の了承を得た後、ICレコーダーで面接を録音した。

(2) 調査内容

フェイスシート

施設利用開始年齢(親並びに子ども)、利用のきっかけ、キーパーソンの記入を、差支えない範囲で求めた。

質問項目

- ① 施設利用開始時に、親が施設に期待していたこと
- ② 施設利用開始後の、子どもに対する親の関わり方の変化
- ③ ②の変化に、施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションがどのように寄与したのかについての、親の認知
- ④ ②の変化と、子どもに対する親の受け止め方の変化との関係についての、親の認知
- ⑤ 施設利用開始後の、親としての自身に対する見方の変化
- ⑥ ⑤の変化に、施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションがどのように寄与したのかについての、親の認知
- ⑦ 施設を利用している親の、施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションに対する要望

⑧ 施設を利用している親が考える、親にとっての施設の役割

2. 分析方法

インタビュー内容は、逐語記録に起こし、大谷（2008、2011）の SCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いて分析を行った。SCAT は、以下の 4 つのステップを経て概念化をしていく。以下は、大谷（2008、2011）を参照し、筆者が適宜まとめたものである。

<1>テキストの中の着目すべき語句の抽出

研究テーマに関わる語、気になる語等を書き出し、着目すべき語句を明確にする。

<2>前項を言い換えるテキスト外の語句の記入

<1>で抽出した語句を、テキストにない語句に変換し、その事象を一般化する。

<3>前項を説明する語句・概念の記入

<2>の背景、条件、原因、影響、比較、特性、次元、変化等を検討し、テキスト外の内容をあてはめる。

<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念の記入

<1>～<3>に基づいて、そこから浮上するテーマを検討する。

この 4 つのステップを踏むことで、データをより抽象度の高いものにしやすくなる。概念化の後、〈4〉で浮き上がったテーマ・構成概念を用いて、調査対象者一人一人の特徴を記述するストーリーラインの作成、理論の生成を行うことができる。

3. 結果 I

研究 I では、SCAT 分析の 4 つのステップを経て、研究協力者 12 名それぞれのストーリーラインを作成した。本稿では、12 名のステップとストーリーライン全てを載せることが不可能なため、ここでは A さんと F さんの 2 名の結果を紹介する。なお、A さんは子どもへの関わり方、親としての自身に対する見方のどちらにも変化ありと回答し、F さんはどちらにも変化なしと回答した方である。また、SCAT のステップ<1>は調査対象者の語りそのものを記す部分であり、その言葉や話し方から個人が特定される可能性が高いため、<2>～<4>のみを記すこととする。

発達に特性のある子どもを持つ親の認知の変化

【Aさん】

1. Aさん

子どもへの関わり方に変化あり、親としての自身に対する見方に変化ありと回答。

	子どもとの関係	利用開始年齢(歳)		子どもの性別	通所している子ども以外の兄弟構成	診断名	継続期間	利用頻度	利用のきっかけ	キーパーソン
		親	子ども							
A	母	40代	10	男	姉、兄、妹	—	2年	週1	知人の紹介	夫(50代)、友人(40代)

ステップ<2>～<4> I

<2>テキスト中の語句の 言い換え	<3>左を説明するテキスト外の 概念	<4>テーマ・構成概念
子どもの言動の捉え方の変化を通した子どもの受容。バランスを欠く自身の考え。第3者の意見。	子どもの言動の受け止めと理解。自分を客観視。自身の不均衡な見方の修正を図る。	自身の子どもの受容の仕方。アンバランスさ。第3者の視点の取り入れ。自身の考えの再検討。
末っ子。子どもの好きにさせる。予測できない行動。考え。	兄弟構成。過去の子育て。予測外の子どもの言動。	自由奔放な子育て。子どもの行動・考えに対する予測不能な感覚。
子どもの捉え方の変化。現在とは異なる場合を想定。	知識がなかったことへの悔い。	施設利用開始が「もう少し早ければ」という悔い。
親自身も前進した。	現在の自身に対する肯定的な捉え。	親としての自身の進歩を実感。
「べき」思考。意識と気持ちの解離。	アンビバレントな思考。何かつかえるもの。	頭では分かっているながらも「こうしなきゃいけない」という思考に左右。
硬くなっていた自身の考えの型から脱せた。	考えの固執からの解放。精神的余裕。	自分の考えに縛られず余裕を持って子どもを見守るホールドの感覚。
親としての自分への自信のなさ。カウンセリングの中での他者承認が自身の自尊感情の形成に寄与。子どもを見守る姿勢。思考の転換。子どもの言動を笑いに変えられる関わり方への変化。	カウンセリングを通した親としての自己肯定感の発達。認知的側面の変化。笑に変えられる心のゆとり。喜び。	カウンセリングでの体験が子どもへの自身の関わり方の変化に寄与した。カウンセリングの中で子どもが他者承認されることによる親としての自己肯定感の発達。子どもの言動を受容しようとする基本姿勢。思考の転換が可能。子どもの言動を笑って楽しめる。

子どもと自分双方にとってプラスという捉え方への転換.	親子ともに納得できる方法の選択.	子どもとの間で折り合いをつけられる親に変化.
カウンセリングへの感謝. カウンセリングにサポートされている感覚.	自身の変化の大きさ. 満足感. 喜び.	カウンセリングへの満足感. カウンセリングを通して援助されている感覚.
年配者や専門家からの意見を 得る機会の少なさ.	年配者・専門家への信頼.	専門家から意見を得られる機 会の貴重さ.
A による子育ての本質に対する 認識の変化.	子育てに関する新たな気づき.	子どもの存在への肯定的意味 づけ.
個性という捉え. 何かを修正す るという意識の否定. 子どもあ りのまを見る.	子どものあるがまを認める. 包括的な子どもの捉え方.	子どもの発達の特徴を個性と して尊重. ありのまを受容.
子どもの好奇心を刺激.	面白さ. 楽しさを重視する親.	子どもの好奇心を触発する親.
子どもを認める姿勢. 楽しさの 共有. 頭の隅にある「べき」思 考.	ありのままの子どもと共に素 直に楽しむ精神的余裕. 無視で きない「べき」思考.	子どもと関わる際の心のゆと りの増幅. 子どもと一緒に素直 に楽しむ親. 払拭できない「べ き」思考.
子どもが他者に認められる. 自 身に生まれた心のゆとり.	子どもが他者承認される機会. 親としての精神的余裕の現れ.	カウンセリングの中で子ども が他者承認される経験. 親の中 に生まれる精神的余裕.
少ない利用回数. 学習を目的と した利用. 改善点なし.	利用頻度. 目的による視点の 差.	利用頻度が減少. 学習が主の利 用目的. 要望は特にない.
安定した通所. 落ち着ける場.	子どもの利用感覚からの判断.	高い通所意欲. 施設に対する安 心感.
不安要素があっても通える. 認 めてもらえる. 率直に話せる 場.	何があっても受け入れてもら える安心感. 他の場との比較.	どんな自分も受け入れてくれ. ありのまま自己表現できる場.
部活動をしながらの利用の難 しさ.	これからの利用に対する不安.	施設の利用時間と他の活動と の兼ね合いに関する不安.
教師や母親のように支えてく れる場. 安心感. 好感. 悩みに 対する糸口を提示. コンサルテ ーションを通した子どもへの 関わりの切り替え. 子どもの新 たな一面への気付き.	プラス思考への転換. 施設の安 定したサポータティブな関わり からくる信頼感. 子どものプラ ス面に目を向ける.	教師や親のような安定した信 頼感. 好感. 自身の不安定さを 支えてくれるサポータティブな 役割. 子どものプラス面や新た な面に目を向ける切り替えポ イントとしての時間.

〈Aさん ストーリーライン〉

Aさんは、自身の子どもを受容の仕方についてアンバランスさを感じ、第3者の視点の取り入れによって、自身の考えを再検討することを期待して施設の利用を開始した。施設を利用する以前は、自由奔放な子育てを基本的在り様としていたため、子どもの行動・考えに対する予測不能な感覚を強く感じていた。今となっては、施設利用開始が「もう少し早ければ」という悔いを抱いている。

子どもへの関わり方について、Aさんは、親としての自身の進歩を実感している。以前は、頭では分かっているながらも「こうしなきゃいけない」という思考に左右されていたが、現在は自分の考えに縛られず余裕を持って子どもを見守るホールドの感覚を得ている。そのような変化を振り返り、カウンセリングでの体験が子どもへの自身の関わり方の変化に寄与したと感じている。具体的には、カウンセリングの中で子どもが他者承認されることによる親としての自己肯定感の発達を感じることで、子どもの言動を受容しようとする基本姿勢の実践や、思考の転換が可能になり、子どもの言動を笑って楽しめるようになったり、子どもとの間で折り合いをつけられる親に変化した。Aさんは、施設での専門家から意見を得られる機会の貴重さから、施設で受けたカウンセリングへの満足感、カウンセリングを通して援助されている感覚を得ている。また、「子どもが子育て自体の在り方を気付かせてくれた」という子どもの存在への肯定的意味づけをしており、子どもの発達の特性を個性として尊重し、ありのままを受容するようになった。

また、親としての自身について、現在は、子どもの好奇心を触発する親になったと捉えている。それは、子どもと関わる際の心のゆとりが増幅し、子どもと一緒に素直に楽しむようになったためである。以前は、払拭できない「べき」思考があった。この変化については、カウンセリングの中で子どもが他者承認される経験と、親の中に生まれる精神的余裕の関連の大きさを感じている。

子どもの学齢が上がった現在では、施設の利用頻度が減少し、学習が主の利用目的となっている。そのため、施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションに対する要望は特にない。また、子ども自身が、高い通所意欲や、施設に対する安心感を抱いていると推察されるため、子どもにとって施設は、どんな自分も受け入れてくれ、ありのまま自己表現できる場であるとAさんは思っている。ただ、施設の利用時間と他の活動との兼ね合いに関する不安を感じている。

Aさんにとって施設は、教師や親のような安定した信頼感、好感を持てる、自身の不安定さを支えてくれるサポーター的な役割を担った存在である。また、施設と関わる時間を、子どものプラス面や新たな面に目を向ける切り替えポイントとしての時間とも捉えている。

【Fさん】

子どもへの関わり方に変化なし、親としての自身に対する見方に変化なしと回答。

	子どもとの関係	利用開始年齢(歳)		子どもの性別	通所している子ども以外の兄弟構成	診断名	継続期間	利用頻度	利用のきっかけ	キーパーソン
F	母	40代	10	男	なし	—	半年	週3	知人の紹介	母(60代)、姉(40代)

ステップ<2>～<4> I

<2>テキスト中の語句の 言い換え	<3>左を説明するテキスト外の 概念	<4>テーマ・構成概念
特に国語と算数における学力の向上、実際の年齢よりも低い知能、年齢相応の知能に僅かでも近づきたい思い。	苦手科目における学力アップ、知的な遅れ、遅れをなるべく小さく抑えたい。	知的な遅れのある子どもに対する学習面での支援、苦手科目において遅れを僅かなものにしたという思い。
支援級の先生のみ。	特別支援学級での対応のみ。	特別支援学級でのみ支援。
小学校入学時からの学力向上への思い、低学年時の熱心な支援級の先生、親のような信頼感。	小学校入学時から継続した願い、信頼できる支援級の先生との出会い。	小学校入学当時から継続した学力向上への思い、支援級での信頼できる先生との出会い、低学年時は支援級の先生に任せる意向。
高学年時に支援級の先生が交代、状況の変化、施設について知っていた実母からの施設利用の勧め、支援はまだ早いと思っていた自身、徐々に学力で遅れをとる子どもが心配で施設の利用開始、子どもの学力向上、自信獲得を実感、過去の自身の行動に対する後悔、子どもの変化に対する驚き。	環境の変化、実母の勧めで施設利用を検討、低学年時は時期尚早との考え、学習面の大幅な遅れ、施設利用開始、学力アップ、自己肯定感の増幅、遅かった決断への後悔、子どもの劇的な変化。	支援級の先生が高学年時に変更、子どもを取り巻く環境の変化、学習面での大幅な遅れを心配して施設利用を開始、施設利用開始の決断が「もう少し早ければ」と後悔。
これからの変化を自身に課す。	現時点では変化なしとの実感。	現時点では変化なしという認識、今後変化することを漠然と自身に課している。

発達に特性のある子どもを持つ親の認知の変化

<p>捉えづらい自分自身の関わり方。怒ることもあり。子どもに甘いという周囲の捉え方。子どもの行動を全て先回り。失敗なく他児と同様にしたいという思い。本来は子ども本人がすること。先回りすることが子どもへの愛情という捉え違い。スタッフとの関わりを通して気づき。子ども本人の行動を辛抱強く待つ姿勢を重要視。自身の短気な性格。先回りすることで自身が落ち着く。</p>	<p>子どもへの自身の関わり方について、自身と周囲の捉え方の微妙なズレ。先回りの子育て。子どもを思うが故の親心。自身の関わり方について振り返るきっかけ。自身には足りない待つ姿勢。もどかしさ。子どものためではなく親自身のための行動。</p>	<p>子どもへの関わり方に対する、自身と周囲の捉え方のズレ。子どもへの関わり方を客観的に把握することが困難。親心が空回り。子どもの行動を先行する関わり方。スタッフとの関わりを通して、子どもの行動を辛抱強く待つ姿勢の重要性への気づき。自身の性格からくるもどかしさ。親自身のために先行したくなることを自覚。</p>
<p>施設利用せず子どもの能力を信じたかったという本心。発達に特性があることを周知して互いに助け合おうとする現在の子育て環境。現在は自身も子どもをすんなりと受容。発達の特性の有無に関わらず存在する子育ての苦労。自身のみならず他者にも子どもを受容してほしい気持ちから子どもの発達の特性を周囲にオープンに。関係性を感じず。</p>	<p>施設利用に嫌悪感を抱いていた過去。子どもの発達の特性を否定。子どもが発達に特性があることや子育ての悩みを打ち明けやすい関係性。半ば当然のように子どもを受容。発達に特性のある子どもの子育てに限らず多くの苦労を体験する子育て。</p>	<p>子どもの発達の特性を受容できず施設利用に嫌悪感を抱いていた過去。発達の特性を含めて子育ての悩みを安心して打ち明けられる友人関係の中で自ずと子どもを受容するように変化。子どもへの関わり方と子どもの受け止め方の関連はない。</p>
<p>親としての自身に対する評価の低さ。</p>	<p>ネガティブイメージ。</p>	<p>親としての自身に対して低い肯定感。</p>
<p>子どもの幼少期時代に働いていた自身。実母に育てられた子ども。子どもの性格は実母が全て把握。実母に任せて自身は子育てにあまり関与せず。重労働の仕事。仕事にばかり目を向ける。子どもに対する包括的な捉えが不十分。退職後に実感。</p>	<p>子育てへの関与の少なさ。ハードワーク。子どもの包括的理解が不十分。</p>	<p>子どもの幼少時代に子どもを実母に任せて自身はハードワーク。子育てへの関与の少なさ。子どもの包括的理解が不十分。退職後に実感。</p>

<p>発達特性への気づき。小学校入学時の普通級、支援級間での迷い。子どもの苦痛を考慮して支援級を選択し様子見。小学校時代6年間の重要性を周囲から伝えられ自身も同意。退職から約5年経った現在。母親としての自覚の芽生え。母親という意識で過ごしている期間の短さ。</p>	<p>子どもの生活・学習環境を巡る問題。学童期の子育てを重要視。母親としての未熟さ。</p>	<p>子どもの発達特性を認知。学童期の子育てを重要視したことをきっかけとして退職。退職から約5年経過した現在。母親としての自覚の芽生え。自身は「母親」を子どもの年齢分は経験していない。</p>
<p>子どもへのスタッフの関わり方を目にする機会。子どもに目線を合わせた関わり方。上から目線で子どもに関わる自身の姿勢への気づき。優しい口調。間違いを素直に認められるような言葉かけ。子どもが理解しやすいよう丁寧に。子どもを尊重する姿勢。否定から言葉にしていく自身を振り返り。</p>	<p>子どもに対する関わり方を観察学習。子どもへの自身の関わり方を振り返り反省。子どもを一人の人間として対等に扱う姿勢。子どもが素直になれる。</p>	<p>子どもと関わる際のスタッフの姿を観察。自身の関わり方を振り返る機会が提供。子どもに対し上から目線であった以前の関わり方を反省。子どもを一人の人間として対等に扱い接する姿勢を学習。</p>
<p>改善点なし。好感。大人数の子どもに対する支援。他所で出会う先生が子どもに関わる際に見える疲労感。疲労感を全く見せない施設のスタッフに対する感心。自身も疲労感を出してしまう。</p>	<p>ポジティブイメージ。多数の子どもを相手とする重労働。他所・自身と施設を比較。</p>	<p>要望は特になし。多くの子どもを相手とするハードワーク。他所のスタッフや自身とは異なり、疲労感を感じさせない施設のスタッフ。感心。</p>
<p>子どもにとって重要な場所であることを再度実感。無知の恐ろしさ。施設利用可能年齢の上限まで利用継続する意志。施設を利用せずにいた場合の恐ろしさ。</p>	<p>子どもの発達特性への誤った捉え方。子どもにとって意義深い場。現在とは異なる場合を想定し冷や汗。</p>	<p>子どもが発達する過程において支援施設が価値ある場だと改めて実感する存在。施設を利用していなかった場合を想定し、現在の状況に安堵。</p>

〈Fさん ストーリーラインⅠ〉

Fさんは、知的な遅れのある子どもに対する学習面での支援を期待し、施設利用を開始した。特に、苦手科目における遅れを僅かなものにしたいという思いを抱いていた。施設利用開始以前、Fさんの子どもは、特別支援学級でのみ支援を受けていた。Fさんには、小学校入学当時から継続した学力向上への思いがあり、支援級での信頼できる先生との出会いから、低学年時は支援級の先生に任せる意向であった。しかし、支援級の先生が高学年時に変更し、子どもを取り巻く環境が変化したことにより、学習面での大幅な遅れを心配して施設利用を開始した。今となつては、施設利用開始の決断が「もう少し早ければ」と後悔している。

子どもへの関わり方については、現時点では変化なしという認識である。そして、今後変化することを漠然と自身に課している。Fさんは、子どもへの関わり方に対する、自身と周囲の捉え方のズレにより、子どもへの関わり方を客観的に把握することが困難であると感じているが、自身と周囲の捉え方を考慮すると、親心が空回りし、子どもの行動を先行する関わり方をしている。そのように関わり方としては現在も変化していない一方で、Fさんは、スタッフとの関わりを通して、子どもの行動を辛抱強く待つ姿勢の重要性への気づきは得ている。また、自身の性格からくるもどかしさから、親自身のために先行したくなることも自覚している。子どもの受け止め方としては、子どもの発達の特性を受容できず施設利用に嫌悪感を抱いていた過去がありながらも、現在は、発達の特性を含めて子育ての悩みを安心して打ち明けられる友人関係の中で自ずと子どもを受容するように変化した。そのため、意識面や受け止め方の面での変化はありつつも、実際の行動面での変化がないことから、Fさんは、子どもへの関わり方と子どもの受け止め方の関連はないと感じている。

Fさんは、親としての自身に対して低い肯定感を抱いている。それは、子どもの幼少時代に子どもを実母に任せて自身はハードワークをしており、子育てへの関与の少なさや、子どもの包括的理解が不十分だったことを退職後に実感したためである。Fさんは、子どもの発達の特性を認知し、学童期の子育てを重要視したことをきっかけとして退職したが、退職から約5年経過した現在、母親としての自覚の芽生えをようやく感じており、自身は「母親」を子どもの年齢分は経験していないとも感じている。母親としての自覚が芽生えたことについては、子どもと関わる際のスタッフの姿を観察したことが関係していると捉えている。スタッフの様子を観察することによって、自身の関わり方を振り返る機会が提供され、子どもに対し上から目線であった以前の関わり方を反省し、子どもを一人の人間として対等に扱い接する姿勢を学習した。

施設のカウンセリング並びにコンサルテーションに対する要望は特にない。多くの子どもを相手とするハードワークの中であっても、他所のスタッフや自身とは異なり、疲労感を感じさせない施設のスタッフに対し、感心している。

Fさんにとって施設は、子どもが発達する過程において支援施設が価値ある場だと改めて実感する存在である。そして、施設を利用していなかった場合を想定し、現在の状況に安堵している。

Ⅲ. 研究Ⅱ

1. 研究方法

(1) 目的

施設利用以前と研究Ⅰ実施時点を比較した際、子どもへの関わり方、又は親としての自身に対する見方が変化していないと回答した研究Ⅰの研究協力者の、研究Ⅰから約半年経過した時点での、親の認知の変化の有無について質的に検討することを目的とする。

(2) 調査対象者

施設利用以前と研究Ⅰ実施時点を比較した際、子どもへの関わり方、又は親としての自身に対する見方が変化していないと回答した研究Ⅰの研究協力者5名。表2は、調査対象者5名それぞれの、研究Ⅱ実施時における施設利用継続期間、研究Ⅰにおける回答を表にしたものである。

表3 研究Ⅱの研究協力者の回答まとめ

	子どもとの関係	継続期間	子どもへの関わり方の変化の有無に対する認知	親としての自身に対する見方の変化の有無に対する認知
F	母	1年	変化なし	変化なし
H	母	2年	変化あり	変化なし
I	母	2年半	変化なし	一部変化あり/一部変化なし
J	父	2年半	変化なし	変化なし
L	母	1年	変化なし	変化なし

(3) 調査手続き

2017年11月に、研究Ⅰと同様に半構造化面接を実施し、その後、大谷（2008、2011）のSCAT法を用いて語りを分析した。

(4) 調査内容

研究Ⅰで変化なしと答えた項目について、研究Ⅰ時の語りを提示しながら、再度、同様の質問を行った。

2. 結果Ⅱ

研究Ⅱでは、研究協力者 5 名それぞれの SCAT 分析結果を、研究Ⅰの SCAT 分析結果と比較しながら調査対象者ごとにまとめ、考察した。本稿では、結果Ⅰで紹介した F さん 1 人の結果と考察を述べる。

【F さん 結果】

子どもへの関わり方に変化あり、親としての自身に対する見方に変化ありと回答。

	子どもとの 関係	利用開始年齢(歳)		子ども の 性別	通所している子ども 以外の兄弟構成	診断名	継続期間	利用頻度	利用のきっかけ	キーパーソン	研究Ⅰでの、子ども への関わり方の変化 の有無に対する認知	研究Ⅰでの、親としての自身 に対する見方の変化の有無に 対する認知
		親	子ども									
F	母	40代	10	男	なし	—	1年	週3	知人の紹介	母(60代)、姉(40代)	変化なし	変化なし

ステップ<2>～<4>Ⅱ

<2>テキスト中の語句の 言い換え	<3>左を説明するテキスト外の 概念	<4>テーマ・構成概念
自身の傾向として未だ先回りしてしまうことも、思春期が始まり自身と距離を取ろうとする子ども、子どもとの間に感じる隔たり、無理に子どもの世界に入ろうとしていた思春期の初期、現在は我慢するよう努力、	自身の性質が関係する部分を変化させることの難しさ、第二次反抗期に突入、親離れ、親の立ち入れない独自の世界を形成する時期、子どもの発達に伴って自身も関わり方を変化、	子どもの行動を先行したくなる自身の性質、関わり方を変化させることの困難さを感じながらも子どもの発達に適切な関わり方を実践、思春期に突入、親離れ、親の介入できない子ども独自の世界の形成、思春期の初め頃は強引に介入、
不安定さを伴う子どもの成長を干渉しない姿勢をスタッフが助言、自身も子どもと一緒に成長すべき、自身の衝動を抑えられない時も多々、何度も積み重ねて少しずつ成長、	子どもを一人の大人として扱うことの重要性、思春期における子どもとの距離感の掴みづらさ、自身の子離れ、失敗をしながら徐々に自身も変化、	施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションでのスタッフの助言を通し、失敗しながらも自身の関わり方を徐々に変化、一人の人間として自立していくための思春期の重要性やそれに伴う不安定さを考慮した上で子どもを干渉しない関わり方へ変化、子どもが親離れする一方で自身も子離れ、

度合いの大きな変化。半年前から習い事がプロコースに移行。様々なタイプの保護者との交流。運動系のエネルギッシュな保護者が半数。自身は運動系ではないが子どもの意思で利用している保護者が半数。子どもの習い事の付き添いで疲労。自身の自由な時間がないことによる心労。運動系の保護者は子どものことを思い熱心に活動。自身の目指す姿に向かって日々少しずつ取り組む現在の自身。	子どもの習い事の変化を契機として自身の対人環境も変化。自身と異なるタイプの親。習い事の変化に伴って感じる精神的疲労感。一方で子どもを思い精力的に活動する保護者の存在から受ける刺激。親としての理想の姿に近づくよう努力。	研究Ⅰ実施時からの変化の大きさを実感。自身とは異なる傾向の保護者と関わる機会の増加。子ども第一に精力的に行動する姿。理想を目指し日々邁進している親という捉えに変化。
要望なし。自身の想像以上の支援をしてくれる施設。夫と共に謝意。子どもが今後躓きそうな部分を事前に演習する支援。	施設への信頼感。現実生活への適応の面で子どもを支持する施設。	要望は特になく。夫婦が期待する以上の支援を行ってくれる施設に対する謝意。
変化なし。	以前と同様。	変化なしとの捉え。

〈Fさん ストーリーラインⅡ〉

Fさんは、研究Ⅰ実施時と比較し、子どもへの関わり方について、子どもの行動を先行したくなる自身の性質から関わり方を変化させることの困難さを感じながらも子どもの発達に適切な関わり方を実践していると捉えている。Fさんの子どもは、思春期に突入し、親離れや、親の介入できない子ども独自の世界の形成を始めている。Fさんは、思春期の初め頃は強引に介入しようとしたが、現在は、施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションでのスタッフの助言を通し、失敗しながらも自身の関わり方を徐々に変化させている。スタッフからの助言とは、具体的には、一人の人間として自立していくための思春期の重要性やそれに伴う不安定さを考慮した上で子どもを干渉しない関わり方へ変化させることであった。その助言を受けて、Fさんは、子どもが親離れする一方で自身も子離れしようと変化を試みたのである。

親としての自身に対する見方については、研究Ⅰ実施時からの変化の大きさを実感している。それは、研究Ⅰ実施後、自身とは異なる傾向の保護者と関わる機会が増加し、子ども第一に精力的に行動する親の姿を目にしたためである。現在では、親としての自身について、理想を目指し日々邁進している親という捉えに変化した。

施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションに対して、要望は特になく、Fさん夫婦が期待する以上の支援を行ってくれる施設に対する謝意を語った。

Fさんにとっての施設の役割に関しては、変化なしとの捉えである。

【Fさん 考察】

Fさんは、研究ⅠとⅡを比較した際、子どもへの関わり方についても、親としての自身に対する見方についても、変化ありとの捉えをしている。まず、子どもへの関わり方について述べる。Fさんは、研究Ⅰ実施時には、子どもの行動を先行する関わり方であった。その後、その関わり方を徐々に変化させ、研究Ⅱ実施時には、一人の人間として自立していくための思春期の重要性や、それに伴う不安定さを考慮した上で、子どもを干渉しない関わり方を実践していると自身を捉えている。Fさんも感じているように、子どもの思春期突入を期に、子どもとの距離の取り方に焦点を当てたカウンセリング並びにコンサルテーションが行われたことが、Fさんのももとの子どもへの関わり方の変化に大きく寄与したと思われる。

また、このような変化は、親としての自身に対する見方の変化とも関連しているのではないかと筆者は感じる。Fさんは、子どもの幼少時代、子育てへ自身が関与する機会が少なかったことや、子どもの包括的理解が不十分だったと感じている。そのことから、親としての自身に対して低い肯定感を抱いていると研究Ⅰ実施時に語っていた。それが、研究Ⅰ実施後に、自身とは異なる傾向の親と関わる機会が増加した。そこで、子ども第一に精力的に行動する親の姿を目にしたことで、自身の意識が変化し、親としての自身に対する見方も、理想を目指し日々邁進している親という捉えに変化した。Fさんは、子どもに対して親らしいことができなかった過去を悔いながらも、理想を目指し日々邁進している現在の自身を肯定できるようになったのである。そのような自身に対する自信の獲得は、子どもへ関わる中でも発揮され、子どもの行動を先行したくなる自身の性質から、関わり方を変化させることの困難さを感じながらも、子どもの発達に適切な関わり方を実践することが可能になったと考えられた。

IV. 総合考察

1. 子どもへの関わり方と、親の認知の変化との関連

放課後等デイサービスでのカウンセリング並びにコンサルテーションを通した、〈発達に特性のある子ども〉を持つ親の認知の変化について述べる前に、ここでは、子どもへの関わり方と、親の認知の変化との関連について見ていく。

問題と目的でも述べたように、親子関係の悪循環からプラスの親子関係へと変化させていくためには、まず親が、子どもの行動を客観的に観察しつつ、冷静に、自身の視点を変えられるだけの親の認知の変化が求められる。しかし、研究Ⅰより、子どもへの関わり方に変化がないとしても、子どもの言動についての認知を変化させた親が複数いることが明らかとなった。具体的な SCAT 分析結果としては、関わり方としては現在も変化していない一方で、子どもの行動を辛抱強く待つ姿勢の重要性への気づきは得ている（F）、意識面での変化は実感 / 自身が冷静に対応することで親子の怒りが相乗しないよう意識（I）、賞賛や容認といった行動が思ったようにできない（J）、頭では理解していても適切な関わり方を実行できない（L）がこれにあてはまった¹。このような親は、プラスの親子関係においてまず第1段階となる、認知の変化は可能であるが、その認知を実際の行動に反映するという、第2段階に進むことが困難な状況にあると考えられる。さらに、研究Ⅰから、子どもの言動を見守る姿勢や、適切な関わり方を頭では分かっているながらも実行に移せないという点において、子どもへの関わり方の変化あり群と変化なし群の、認知と行動面の変化に共通点が見られた。このことから、子どもへの関わり方を変化させた親は、認知は変化させながらも行動へ移せないという途中段階を踏み、研究Ⅰ実施時には、子どもへの関わり方を変化させるに至ったのだと言えよう。以上より、子どもへの関わり方に変化がない親も、変化した認知を行動に移すという段階を踏むことで、子どもへの関わり方をいずれ変化させるのではないかと筆者は推測する。認知を行動に移す段階での支援についても、今後、研究が行われる必要があると思われる。

（注1）SCAT 分析結果を記す部分では、調査対象者の記号を、（A さん）から（A）というように、敬称を略して記している。

2. 親の認知の変化への、カウンセリング並びにコンサルテーションの寄与

研究Ⅰより、放課後等デイサービスの利用を通して親の認知が変化し、また、その変化に、施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションが大きく寄与していることが明らかとなった。そこで、ここでは、親の認知の変化への、カウンセリング並びにコンサルテーションの寄与についてまとめていく。

まず、子どもへの関わり方及び認知への変化についてである。変化の仕方として特に多く語られたのは、「高圧的な姿勢によって子どもを統制しようとする関わり方の再検討」、「親自身の中に存在する『べき』思考からの脱却」、「子どもの言動を見守る姿勢」であった（表4）。そして、その変化に対する、施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションの寄与として、特に多く語られたのは、「親の良き理解者、相談相手としての施設」、「施設からの助言を通した新たな視点の取り入れ」を通した寄与であった（表5）。その他には、カウンセリングの中で子どもが他者承認されることによる親としての自己肯定感の発達（A）や、カウンセリング中の、子どもに対する現在までの自身の認識・行動についての内省（C）、カタルシスの感覚を得ることで、自身の心が安定すること（F）を通した寄与等が語られた。子どもへの関わり方及び認知への変化への、カウンセリング並びにコンサルテーションの寄与の仕方は多様でありながらも、その寄与の大きさは共通していることが明らかとなった。親一人一人の状況に沿った支援を根底とし、その中で特に、親の気持ちに寄り添いつつ、第3者としての視点を親に提供するという姿勢が、放課後等デイサービスでのこれからの親支援には重要と考えられた。

次に、親としての自身に対する見方の変化についてである。変化の仕方として特に多く語られたのは、「『べき』思考からの脱却」「自己肯定感の発達」「子どもにプラスの影響を与える親への変化」であった（表6）。そして、その変化に対する、施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションの寄与として、特に多く語られたのは、「カウンセリング並びにコンサルテーションの中での助言」である（表7）。例としては、「変わるべきは子どもではなく親」というカウンセリングの中での助言（B）、スタッフからの肯定的な声掛け・助言、特に、子離れの必要性についての助言（C）が挙げられる。また、それ以外にも、多様な寄与の仕方が語られた。例えば、カウンセリングの中で子どもが他者承認される経験と、親の中に生まれる精神的余裕の関連の大きさ（A）、そこからは、自身を支持してくれる施設への信頼感から相談のし易さ（G）等である。そのような多様性から、親としての自身に対する見方についても、親一人一人の状況に沿った支援を根底とすることの必要性が窺える。加えて、親としての在り方や姿勢についての具体的な助言の提供は、何を頼りにしてよいか分からない親の心の道しるべとなるため、放課後等デイサービスでのこれからの親支援において重要なものと考えられた。

表4 施設利用開始後の、子どもに対する親の関わり方の変化

変化あり 群	施設利用開始 以前	高圧的な姿勢によって 子どもを統制しようと する関わり方	高圧的で突き放すという、未だ幼い子どもに対して隙のない 関わり方 (B)
			子どもの失敗を認めず否定する関わり方 (C)
			子どもの行動を力で抑制 (D)
			厳しくて否定的な関わり (G)
			常時怒る姿勢 (H)
			できないことを何度も指摘 / 子どものことを統制しようと する姿勢 (K)
		親自身の中に存在する 「べき」思考への 囚われ	頭では分かっているながらも「べき」思考に左右 (A)
	自身の中に存在する子どもについての「べき」思考 (B)		
	「べき」思考への囚われ (C)		
	変化後	子どもの言動を見守る 姿勢	自分の考えに縛られず余裕を持って子どもを見守るホールド の感覚を獲得 (A)
			子どもの成功失敗に関わらず安定して見守る姿勢 (B)
			本人の意向を尊重し見守る姿勢 (C)
			我が子の発達の特徴を考慮して、子どもの話を否定せず最後 まで聞く姿勢 (D)
			できない状況を容認し指摘しない (K)
変化なし 群	適切な関わり方を頭では分かっている ながらも実行に移せない	関わり方としては現在も変化していない一方で、子どもの行 動を辛抱強く待つ姿勢の重要性への気づきは得ている (F)	
		意識面での変化は実感 / 自身が冷静に対応することで親子 の怒りが相乗しないよう意識 (I)	
		賞賛や容認といった行動が思ったようにできない (J)	
		頭では理解していても適切な関わり方を実行できない (L)	
	感情のコントロールが不能になる	感情のコントロールが不能になる (J)	
		苛立ちやすさから感情のコントロールが不能 (L)	

発達に特性のある子どもを持つ親の認知の変化

表 5 ②の変化に、施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションがどのように寄与したのかについての、親の認知

親の良き理解者、相談相手としての施設	良き理解者として相談を受けてくれる施設の存在 (G)
	一人で抱え込みがちな現状の中で、相談相手としての役割を担う施設の存在の貴重さ (H)
施設からの助言を通した新たな視点の取り入れ	子どもが行えないのは当然との視点や、その行動をする、子どもなりの理由が存在するとの視点の取り入れ (B)
	施設からの子どものありのままを受容することについての具体的な助言により自身の子育ての方向性が見えた (K)

表 6 施設利用開始後の、親としての自身に対する見方の変化

受け止め方に 変化あり	施設利用開始以前	「べき」思考への 囚われ	払拭できない「べき」思考 (A)
			子どもを一つの型にはめようとする思考を持つ親 (D)
			親としての「べき」思考 (K)
	変化後	自己肯定感の発達	親として相応しいことが僅かでも出来ている自身への肯定感 (B)
			自分で自分を肯定できる親へと変化 (C)
			親としての自身の変化や苦労を肯定的に評価 (K)
受け止め方に 変化なし		子どもにプラスの影響 を与える親への変化	子どもの好奇心を触発する親 (A)
			子どもが安心して共に過ごせる親 (B)
			過去の子育てへの関与の少なさや、子どもの包括的理解が不十分だったことからくる低い肯定感 (F)
			頭では理解していながらも理想の関わり方が実行不可能な時がある (H)
	低い肯定感		子どもに適切な関わりが出来ていない親 (J)
			無慈悲な親 (L)

表7 ⑥の変化に、施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションがどのように寄与したのかについての、親の認知

カウンセリング並びにコンサルテーションの中での助言を通した変化	「変わるべきは子どもではなく親」というカウンセリングの中での助言の意味を、親としての自身の変化を通して痛感 (B)
	スタッフからの肯定的な声掛け・助言、特に、子離れの必要性についての助言がその変化に寄与 (C)
	スタッフからの助言に援助されている感覚 (G)

3. 親の認知傾向を考慮した支援の必要性

研究Ⅰより、施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションが、子どもへの関わり方及び認知の変化へ寄与した親が多かった一方で、その変化がなかなか見られない親も少なくないことが明らかとなった。そして、研究Ⅱより、その親の共通点として明らかとなったのは、次の2点である。1点目は、子どもへの関わり方と、親としての自身に対する見方に否定的な関連が見られる点、2点目は、自身の肯定的な部分ではなく、否定的な部分へ焦点付けするという認知傾向にある点であった。

また、研究Ⅱからは、研究Ⅱの調査対象者の中でも、施設利用期間が比較的長い親は、利用期間の長さに関わらず、肯定的な変化が見られない可能性が示唆された。単純に考えて、施設利用期間が長いほど、肯定的な変化が起こる確率が上昇していくように思われるが、本研究では逆の結果が見られたと言える。以下、その理由について、あくまでも筆者の推察でしかないが述べる。利用期間が長く、子どもへの関わり方及び認知が変化しなかった親は、上に挙げた共通点の傾向が特に強く、利用期間が長期だとしても、その傾向に焦点を当てた支援でなければ、なかなか変化していかないのではないだろうか。つまり、先述した、親の気持ちに寄り添いつつ、第3者としての視点を親に提供するという姿勢や、親としての在り方や姿勢についての具体的な助言の提供のみでは、上記2点の傾向が強い親については十分な認知の変化にはつながりにくいと考えられる。そのため、子どもへの関わり方と、親としての自身についての見方との関連について考慮しつつ、親本人が、不十分と思う自身の部分にばかり目を向けるのではなく、自身の持つ力や良いところを大切に思えるような、いわゆる、親本人をエンパワメントする支援を行うことが、放課後等デイサービスでの親支援には求められるのではないだろうか。

そこで、親本人をエンパワメントするための具体的な支援として、以下の2点を筆者は提案する。1点目に、子どもと親の肯定的な面や、良好な親子の関わりについて話す時間を、カウンセリング並

びにコンサルテーションの中で定期的に提供することを挙げる。前述したように、〈発達に特性のある子ども〉を持つ親は、一般の子どもの子育てにおいて親が感じる感情に加え、子どもの発達の特性を知ることによるネガティブな気持ちや葛藤といった、さまざまな感情を経験する。そして、親はその悩みを解決することに必死になり、施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションにおいても、目の前の子どもへの対応についての困り感や、子どもや親自身のネガティブな面を取り上げた話になりやすいと推察される。そのため、施設でのカウンセリング並びにコンサルテーションの中で、子どもや親自身、そして親子関係の肯定的な面への視点の転換を意識的に行うことで、否定的な面に焦点を当てやすいという、親の認知傾向を緩和できるのではないかと筆者は考える。これについては、意識して、定期的に行うことが鍵である。親が悩みを語る中で肯定的な部分に焦点を当てるというよりも、そのカウンセリング並びにコンサルテーションの時間の中で、子どもや親自身、そして親子関係の肯定的な部分を自由に語るのである。そのような機会を何度も繰り返すことで、普段の親子の関わりの中でも、親子の肯定的な部分への視点の転換が可能になるのではないかと筆者は考える。

2点目に、完璧な親である必要はないということを、親支援全般において繰り返し伝えていくことを挙げる。研究Ⅱより、子どもへの関わり方及び認知がなかなか変化しない親への支援として、親としての自身全体を包括的な視点で捉え、自身の在り方をありのまま受容することできるような支援が重要と考えられた。カウンセリング並びにコンサルテーションは、親支援の中で最も日常的に行われている支援であり、親の認知の切り替えを何度も促すことができる。そして、その中では、親それぞれの詳しい状況に合わせ、親本人に直接伝えることが可能である。次に、保護者会・講演会では、他の親との交流を通じて、親として完璧でなくても、自身の在り方を包括的に捉え、ありのまま受容している他の親の生の声を聞くことが可能である。カウンセリング並びにコンサルテーションでスタッフから聞くよりも、実際の親の話を聞く機会が有益な場合もあり得るだろう。このように、カウンセリング並びにコンサルテーションと、保護者会・講演会のそれぞれの良さを上手く組み合わせ、完璧な親である必要はないと繰り返し伝えていくことで、親本人が、自身の在り方をありのまま受容することができるようになると筆者は考える。

以上、親本人をエンパワメントするための支援について述べてきた。親本人をエンパワメントするという視点は、子どもの発達の特性に対する親の認知や、子どもへの親の関わり方をいずれ変化させていくという点で、これからの放課後等デイサービスでの親支援において注目すべき点と言えるのではないだろうか。

V. 今後の課題

ここでは、本研究の課題を2点述べる。

1点目は、半構造化面接における質問項目、質問方法の検討である。本研究で用いた質問項目は、先行研究を参考にし、筆者が作成したものである。しかし、先行研究の少なさから、本研究独自の質問項目や質問方法が多かったと言える。そのため、以下のような課題が出てきた。それは、「子どもの受け止め方」や「親としての自身に対する見方」等の、普段なかなか意識しない認知の部分へ、調査対象者の意識を向けるための筆者の言葉の不十分さである。メタ認知をしやすいような質問項目、質問の際に用いる具体的な言葉を、より慎重に選択する必要があったと考えられる。

2点目は、調査対象とした放課後等デイサービスが一か所であったことである。問題と目的でも述べたように、放課後等デイサービスの支援内容は多様化している。そのため、本研究の結果を、放課後等デイサービス全体の結果として一般化することには慎重にならざるを得ない。親子それぞれに対する支援内容や支援方針が、A放課後等デイサービスとは異なる放課後等デイサービスを対象とした研究を進めることが、今後、必要であると考えられる。

謝辞

本研究を進めるにあたり、指導教授である園田雅代先生には、終始懇切丁寧なご指導をいただきました。時に厳しく、時に温かな先生のご指導にはいつも励まされ、先生の真心のご指導があったからこそ、本論文を完成させることができて感じております。厚く御礼申し上げます。

また、本研究への協力依頼を快諾して下さったA放課後等デイサービスのスタッフの皆様、研究に快く協力して下さった12名の保護者の方々に深く感謝申し上げます。〈発達に特性のある子ども〉と、その親へのよりよい支援のためにとの思いで協力して下さった皆様の生の声を、今後の自身の心理臨床の実践、そして研究に活かして参ります。

参考文献

一般社団法人全国児童発達支援協議会（2013）、「厚生労働省平成25年度障害者総合福祉推進事業 障害児通所支援の今後の在り方に関する調査研究報告書」

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000067397.pdf>（閲覧日：2017年12月5日）

岩坂英巳（2010）、「家族を支援する」『発達障害の理解と支援を考える』、臨床心理学増刊第2号、141項～147項

岩坂英巳編著（2012）、『困っている子をほめて育てるペアレント・トレーニングガイドブック—活用のポイントと実践例—』、じほう

- 大谷尚（2008）、「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」、名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要、vol.54 No.2、27 項～44 項
- 大谷尚（2011）、「SCAT : Steps for Coding and Theorization—明示の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」、日本感性工学会論文誌 vol.10 No.3、155 項～160 項
- 大西慶子・永田博・武井裕子（2013）、「高機能広汎性発達障害児をもつ母親の子どもの捉え方とそ
の変容過程—療育プログラムに参加した母親を対象とした質的研究—」、川崎医療福祉学会誌
vol.23 No.1、159 項～168 項
- 産経新聞（2015.7.2）、「『花嫁修行のため』女兒に自宅の犬小屋掃除させる 怒鳴る、泣かせる…
障害児支援事業者処分」
- 鍛冶谷静（2015）、「DSM-5 の改訂とグレーゾーン」、四條畷学園短期大学紀要第 48 巻、25 項～
29 項
- 神奈川新聞（2014.1.22）、「知的障害児にわいせつ容疑、施設職員を逮捕」厚生労働省（2012）、
「児童福祉法の一部改正の概要について」
http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/jiritsushien/dl/setdumeikai_0113_04.pdf（閲覧
日：2017 年 4 月 25 日）
- 厚生労働省（2015）、「放課後等デイサービスガイドライン」
[http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushi
bu-Kikakuka/0000082829.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushi-bu-Kikakuka/0000082829.pdf)（閲覧日：2017 年 4 月 25 日）
- 全国放課後連編（2017）、『放課後等デイサービス ハンドブッカー子どもたちのゆたかな育ちのた
めに』、かもがわ出版
- 中田洋二郎（2002）、『子どもの障害をどう受容するか』、大月書店
- 宮脇克実・上岡義典・椎野広久（2012）、「療育を受けている子どもの母親意識の変化—児童デイサ
ービスを利用している母親の振り返りから—」、徳島大学総合科学部人間科学研究第 20 巻、
49 項～57 項
- 焼山正嗣・岡本裕子・森田修平（2015）、「放課後等デイサービスを利用する母親の子どもに対する
発達障害理解の変容過程」、広島大学心理学研究第 15 号、93 項～108 項
- 山本佳代子（2015）、「障害のある子どもの放課後活動における制度化の展開」、西南女学院大学紀
要 Vol.19、79 項～88 項
- 山本佳代子（2016）、「北九州市における放課後等デイサービス事業所に関するアンケート調査」、
西南女学院大学紀要 Vol.20、43 項～50 項

山本佳代子（2017）、「K市における放課後等デイサービス事業所の現状と課題—放課後等デイサービスガイドラインをふまえて—」、西南女学院大学紀要 Vol.21、107 項～113 項